

5歳児と自然のかかわり (1)

斎藤 健司¹⁾*・鈴木 恭子²⁾・高月 教恵¹⁾

1) 新見公立短期大学幼児教育学科 2) 元岡山県井笠管内三郡保育協議会

(2017年11月15日受理)

保育環境の中に自然を取り入れることにより子どもの好奇心や探究心が高まることを、保育者は経験的に理解している。しかし、具体的にどのような環境設定を行えば良いのか捉えきれていないところもある。乳幼児と自然環境の関わりについてこれまでいくつか知見が得られているが、子どもの園での行動をもとに分析した研究は少ない。そこで、本研究では子どもと自然との関わりについて担任による1年間の行動観察記録をもとに考察を行った。その結果、自然体験の質的、量的豊かさが、子どものその後の行動やものの見方、考え方に良い影響を与えていると示唆されるいくつかの知見を得たので報告する。

(キーワード) 乳幼児、保育内容「環境」

1. はじめに

自然についてフレーベルは「自然そのものは、いわば慈母のように、人間を導いて、人間に対して自然の宝、自然の富、あらゆる多様性をひとつに全体に結合する自然の内面的な合法則性を、いや自然の中に作用する力の生命もしくは統一をらしめるようにするのである。もしわれわれが不活発に、またわれわれの感覚を用いないで自然を凝視したりするようなことさえしなければ、というよりはむしろわれわれの眼を用い、われわれ内部の心を開こうと努力するならば、自然はその内部的な本質を人間にらしめ、明らかならしめるようにするのである。」と述べている(フレーベル, 荒井 1964a, 1964b)。さらに彼は、「自然はただの人間の智力を形成するだけではなく、それはまた人間の理性を發展させ、人間の情意を培い、温め、そして生気づけるものである。」と述べている(フレーベル, 荒井 1964a, 1964b)。自然は、人間に知識や経験を与えているだけでなく、人間らしい心や精神を育てているとフレーベルは主張している。

また、彼は大人ではなく幼児期に自然に触れることの重要性を次のように唱えている。彼は、「幼児はすべてこれらの状況や印象に対して最も敏感な成人よりももっと敏感である。すなわち魂と精神の力を感知しやすい敏感な感覚が幼児のうちには生きており、宿っておりまたはたらいっている。」と述べている(フレーベル, 荒井 1964a, 1964b)。幼児期は周囲の環境に敏感で、生まれて間もない時期に感じたことや、体験したことがその後の人間形成に大きく関わっている。そのため、幼児期に触れるものが大切である。フレーベルは、幼児期に自然と触れ合うことが重要である

と主張している。

フレーベルの思想は日本人にも馴染みやすかったようである。幼稚園に自然を取り入れるというフレーベルの考えについて、岩崎次男は「フレーベルの自然は人間と同じように神から出てきたものとして、また人間と同じように神の本質を持つものとして、我々人間は自然と和合し、調和して生きるべきものであるという自然観は、東洋人あるいは日本人に近いものであり、また極めて今日的な、自然破壊が我々人類の環境破壊として進行している今日にこそ我々が持つべき、自然観であるように思われる。」と述べている(岩崎 1990)。岩崎次男はフレーベルの自然観や児童観が日本人に馴染みやすいと述べ、様々な幼児教育の問題がある現代の日本においても自然と関わる保育は重要であると主張している。

子どもと自然のかかわりを理解するために、J.J.ギブソンはアフォーダンス理論を提唱して取り組んだ。ギブソンは知覚研究を専門とし、認知心理学とは違う直接知覚説を展開した。彼は知覚を単なる情報のインプットではなく、「気づくこと」と述べている(J.J.ギブソン, 古崎敬 1986)。ギブソンの研究について汐見稔幸は、「人間の行動はこれまで考えられていたよりも人的環境を含めた環境の影響を強く受けていることがアフォーダンス研究や最近の人間行動学、発達心理学等の研究によって明らかになりつつある。」と述べている(汐見ら 2012)。汐見はアフォーダンスについて「生態学的心理学者J.J.ギブソンが作り出した概念である。彼は、『環境が子どもの行為をアフォード(誘発)する』と述べ、環境の重要性を指摘している。」と紹介している(汐見ら 2012)。

このように、保育環境の中に自然をいかに取り入れるか

*連絡先: 斎藤健司 新見公立短期大学幼児教育学科 718-8585 新見市西方1263-2

が大きな課題である。そのため、環境設定の重要性が高まっている。乳幼児と自然環境の関わりについて、これまでいくつか知見が得られている。高月教恵は、子どもと自然との関わりについて、子どもの心の育ちと、保育者の関わりについて研究をしている（高月 2002a, 2002b）。高月は、0～1歳児の子どもと自然との関わりについて保育者が観察した記録に基づいて調査したところ、保育者が保育室や園庭に子どもと自然が関わる機会を準備し、子供と共に保育者が自然に関わることが子どもの育つきっかけになっていることが示唆されたと述べている。子どもと自然との関わりを明らかにする上で意義がある知見であるが、対象が0～1歳児のみであり、それよりも上の年齢の研究結果は発表されていない。また、藤井伊津子と高月教恵は保育所13箇所の園内にある植物と小動物を春夏秋冬に分けて詳細に調査している（藤井、高月 2003, 2005, 2006, 2007）。しかし、園の実態調査が中心であり、子どもと自然環境についての考察をした研究ではない。

そこで、本研究では子どもと自然との関わりについて年齢別に考察を行う。特に本稿では5歳時に焦点を合わせて、5才児がどういう環境に興味を持ち、どのように自然に関われるのか考察する。

2. 方法

1) 観察方法

観察対象の子どもは、岡山県のO保育園（2、3歳児混合10名、4歳児クラス17名、5歳児クラス13名、職員5名）の5歳児クラスのE子（6月6日生）である。観察は、E子と5歳児クラスの子どもの様子、自然とのかかわりを中心に記録した。記録は、E子の保育者（担任：筆者の鈴木）が園で共に生活する中で1年間の行動観察を実施して記録した。この期間中、毎月1回、筆者の高月と岡山県井笠管内三郡13保育園の代表保育士（観察者を含む）で研究会を開催し、観察記録に基づいて検討を行い、子どもの育ちと保育者のかかわり（環境構成等）について記録を整理した。

2) 倫理的配慮

なお、調査対象者および保護者には、文章および口頭で、研究の趣旨、記録と公表の方法、個人情報の保護を説明し、調査への参加は任意であり、不参加によって不利益を受けないこと、観察記録を報告書や論文等として公表することはあるが、個人が特定、推測されるような可能性がある方法で公表することはしないことを伝え、口頭で同意を得て調査を行った。

3. 結果と考察

事例1 チューリップの花の色への興味

観察日：4月7日（月）

朝、園庭で遊んでいた。隣の小学校校庭に咲いているチューリップに子どもたちが興味を持つ。子どもたちはチューリップの色について話し出す。友だちが口々に色の感想を言うのを聞きながらE子は「しろにピンクがまじっとる。きれいじゃなあ。」と言う。

T男が「このチューリップはくろじゃなあ。せんせい。」と言い、K男が「ちがう。むらさきじゃ。」と言うので、保育者は「どっちじゃろかな。」と言って一緒に考える。N子が「せんせい、しょうがっこうのせんせいにきいてみる？」と言うのを聞いて、E子が「せんせいわからんときにはきいたほうがええよ。」と言う。

T男が「このチューリップはくろじゃなあ。せんせい。」と言い、K男が「ちがう。むらさきじゃ。」と言うので、保育者は「どっちじゃろかな。」と言って一緒に考える。N子が「せんせい、しょうがっこうのせんせいにきいてみる？」と言うのを聞いて、E子が「せんせいわからんときにはきいたほうがええよ。」と言う。

4月当初のE子は、引っ越しにより環境が変わったため母親から離れずに泣く姿が見られた。クラスの中にもなかなか入ろうとしなかった。しかし、チューリップの花の色について話し合っている時に、「しろにピンクがまじっとる。きれいじゃなあ。」と言うなど、自分の思いを口に出して言うことが出来ている。

子どもたちはチューリップを見慣れているが、小学校に咲いているチューリップを改めてよく見ることで、口々にチューリップの色について発言をしている。E子も友だちの影響を受けて、改めて花の色に興味をもって観察し、「しろにピンクがまじっとる。」と表現し、「きれいじゃなあ。」という言葉から感動している様子うかがわれる。

E子はチューリップの花の色について疑問をもち、そのことを、他の子どもと話し合う中でクラスに馴染み始めている様子うかがわれる。

事例2 チューリップの種への興味

観察日：4月・5月

4月27日（木）：チューリップの花が散りかけている。保育者とともに小学校の花壇に行く。子どもたちが「せんせいチューリップのはながおちてもうたなあ」「このまえ、かぜがすごいふいたからおちたんじゃ」「かみなりもきこえたよ」「ちがうよ、はながおわたんじゃ。ひとりでおちるんじゃ」と言うと、E子が「かぜがふいてあめがふったんじゃ。」と言う。

子どもたちが「せんせい、このふくらんどのが実なの？たねがはいってるかな。」「チューリップのたねをみてみたい。」「チューリップはたねがあるの？」「あるじゃろう」「みたことない。みたーい。」と言うと、E子も「みたい。」と言う。保育者は「チューリップの実

が大きくなるまで待とう」と言って、暫く待つことになった。

5月11日（木）：チューリップの種を気にしたA子が「チューリップのたねできているかな。げんきないよ。」と言う。保育者が包丁とまな板を用意し、チューリップの実を切って見せる。チューリップの実を見てE子は「せんせい、ちいさいなあ。」と言う。保育者が「そうだね。小さいから大きくなるまでに随分かかるんよ。だから秋に球根を植えるには種の方に栄養を取られないように茎を折って球根を太らせるんよな。」と伝え、以前に種をとって育てた球根と、花を折った球根を並べて見せる。J男が「はようさくけえ、きゅうこんのほうがあえな。」と言うのを聞いて、E子は「たねはかわいそうじゃなあ。」と言う。

チューリップの花が散ったのは、前の週の雨と風が原因と思っただ子どもが多かったようである。「はながおわたんじゃ。ひとりでおちるんじゃ」という友だちの発言に対して、E子が「なぜがふいてあめがふったんじゃ。」と言っていることから、E子は花が散ることには興味をもっているが、「花が終わると、自然に花が散る。」ということはまだ理解できていないようである。

しかし、保育者が実を切って種をみせてくれたことから、E子はチューリップの実に種があることを知り、「ちいさいなあ。」と驚き、花を折った球根に比べて「たねはかわいそうじゃなあ。」と感想を述べている。このことから、E子は、チューリップの種とのかかわりを通して、チューリップの種に対する親しみや思いやりが感じられる。

事例3 ダンゴムシへの興味

観察日：6月6日（火）

朝、H子とA子とK男がポケット図鑑を持ってダンゴムシを探して歩いていた。ダンゴムシが見つかりケースに入れて飼うことになった。保育者がダンゴムシを飼うためのケースを用意しているのを見て、E子は「なにがおったん。」と言いながらA子、H子、K男のそばに寄って一緒に見る。Y男が図鑑を見ながら「いしをいれたほうがいいよ。」と言うのを聞いて、E子は「はっぱもいれんと。」と言う。

E子は自分から園庭に葉を探しに出かける。E子が緑色の葉を探してくると、J男が「ちいろのはっぱでねえといけん。」と図鑑を見て言う。それを聞いてE子はカイヅカイブキの木の下から落ち葉を拾ってくる。K男が図鑑を見て、土に霧吹きで水をかける事を知る。E子が「せんせいやってみて。」と言う。それを聞いて保育者が霧吹きで水をかける。その様子を見て、E子は「わたしもやらせて。」と言う。E子は保育者に霧吹きを渡してもらいケースの中に水をかける。

この会話から、子どもたちは身近なダンゴムシに親しみをもって接していることがわかる。飼育の話し合いや準備にE子も積極的に参加している。E子は探してきた緑色の葉が飼育に適していないことを知ると、改めて茶色の落ち葉を探しに出かけていることから、E子のダンゴムシをいたわり、大切にしようとしている思いが伝わってくる。E子は、霧吹きで土に水をかける時に「せんせいやってみて。」と言って先に保育者にしてもらって、保育者の適切な動きを見てから、「わたしもやらせて。」と言って、真似て行動している。このことから、ダンゴムシの生命を大切にしようとしている様子がうかがわれる。

E子は4月から熱心に自然環境にかかわる姿が見られていた。しかし、そのかかわり方は、E子1人が自然とかかわる姿が中心であった。6月になり、園での生活に慣れてくると、自然とのかかわり方も、自分1人ではなく保育者や友だちなど他者とともにかかわる姿が見られるようになった。

事例4 田植えの準備と苗植え

観察日：6月

6月12日（月）に農家の田植えの準備と苗植えの様子を見るために園外に出かける。

6月19日（月）に、園庭の南側に田んぼを作る。E子も田んぼ作りを手伝う。6月22日（木）に田んぼの代掻きをする。E子も「にゆるにゆるするなあ。」と声をあげながら代掻きを楽しむ。

6月23日（金）に小雨の中、田植えをする。O男が「じゅんばんじゃがなあ。」と言うのを聞いて、E子はZ男と口をそろえて「そうじゃ、そうじゃ。」と言う。E子の順番になり、苗を植える。自分の植えた苗を見ながら「Mちゃん、じょうずじゃろ。」と言う。田植えの後、部屋に戻りみんなで稲の育て方の話をする。E子は「おばあちゃんにきいてくる。」と言う。

E子たちは代掻きをするときに、足の裏で泥に触れ感触を楽しんでいる。また、田んぼで風を感じたり、泥や草木の香りをかいだり、様々な音を聞いたりして、自然環境を五感で強く感じている。田植えでは、自ら「Mちゃん、じょうずじゃろ。」と言うなど自分の行動に満足している様子がうかがえる。

E子は、保育者や友だちと一緒に田んぼ作りや田植えに参加し、その時に感動を伝え合い、共感し合っている。稲の育て方について、E子が「おばあちゃんにきいてくる。」と言ったことから、稲作りへの意欲が感じられる。

事例5 稲作への興味

観察日：7月・8月

7月5日（水）の朝、I男が「たんぼのなかにみどりのちいさいくさみtainはっぱができてとんで。みてみ。」と

言うのを聞いて、E子はA子、B子、C子と一緒に田んぼの様子を見に行く。保育者の所に戻り、E子はA子、B子達と田んぼの様子を話す。A子が「うちのたんぼにもある。」と保育者に言うのを聞いて、E子は「うちにもある。」と答える。

8月10日（木）、自分達の田んぼの様子を見た後、園長先生が稲作の話しながら肥料を与える様子を見る。E子は園長先生の真似をしながら「くすりはたくさん入れたらいねがくるくなるから、バラバラとまく」と言う。C子「しっかりめんどうみんといけん。」Y男「よそのたんぼよりぼくらのたんぼのほうがきれいにできる。」という発言を聞いて、E子は「いねができるまでみずやりをしよう。」と言う。保育者が子どもに「お家でお米がどうやって出来るかも一度聞いてごらん」と言う。

8月16日（水）、お盆明けのため登園者は半数ほどである。E子が登園時に「せんせい、これ。」と言って稲の作り方が書かれた紙きれを保育者に渡す。保育者が「誰が書いたの！よく覚えていたねえ。」と言うと、「おばあちゃんにきいて、おかあさんがかいてくれた。」と嬉しそうに答えた。しばらくして登園したY男が「いねのいろがかわってるで。」と言う。その言葉を聞いて、みんなで田んぼに見に行く。稲を見ながら話し合い、E子は「せがたかくなって、みどりがきれいになったなあ」と言う。

E子は代掻きと苗植えをして以来、田んぼの様子を気にしたり、友だちと田んぼについて話したりするなど、稲作に興味を持っている様子がうかがわれる。E子は、6月に「（稲作りについて）おばあちゃんにきいてくる。」と言って、その2か月後に稲の作り方が書かれた紙きれを保育者に渡していることから、この間ずっと稲作りのことを思い続けてきたと考えられる。また、E子は稲を見て「せがたかくなって、みどりがきれいになったなあ」と言っている。6月の田植えから途切れることなく稲に関心を持ち続けていたからこそ、植物の生長を敏感に感じ取ることができたと考えられる。

4月当初のE子は、同じクラスの友だちと馴染めずに、母親や保育者から離れずにいた。しかし、この数か月間、園環境の中で友だちと一緒に遊んだり生活をしたりすることで、他の子どもから受け入れてもらえているという安心感を得たと考える。E子が園長先生の真似をしたのも、周りの友達が自然に受け入れてくれる自信と安心感があったためと考える。

事例6 かかしへの興味

観察日：9月

9月19日（火）：子どもたちは運動会の練習帰りに小学校校庭のかかしを見つける。E子は「このかおながいなあ。ぼうしはかわいいけど。」と言う。保育者が「どう

してかかしを立てると思う？」と問いかけると、S子が「おこめをとられんようにしとるんで」と言い、Y男が「そうじゃ、びっくりさせるんじゃ。」と言う。E子も「おばあちゃんがいった。」と言う。

9月28日（木）：朝、I男が稲穂の一部が食べられていることを見つけ「せんせい、すずめがコメをたべとる」と言う。そこから園でもかかしを作ることになる。N子が「スカートつくる。」と言うと、E子は「わたしも」と言ってスカートをナイロン袋で作る。さらに「おはなもつけようや」と言う。

事例7 稲刈り、脱穀、おにぎり作り

観察日：10月・11月

10月31日（火）：園で育てた稲を刈ることにした。E子は他の子どもが刈るのをじっと見ている。E子の順番になり稲を刈った後、「どきどきして汗かいた。」と言って手のひらを見せる。その後「きれてよかった。」と、ほっとした表情で友だちに話す。刈った稲を束にして枝にかけて干す。E子は稲刈りを振り返って「おもしろかったなあ」と言う。

11月8日（水）：園で育てた稲を手でむいて脱穀する。E子はY男、I男、S男と一緒に籾のからをむく。E子は「なかなかむけん。」と言う。S子に教えてもらってようやく籾殻をむき、「ひとつむけた。」とほっとした表情で次に取り組む。

11月14日（火）：収穫した米で炊き込みご飯のおにぎりを作る。みんな「せんせい、あついなあ。まるおにぎりでもええ。」「せんせいわたしさんかくができる。」「ぼくバナナにしてたべるぞ。」「くりがはいっとるで。」「このきのこおいしいで」などと言う。E子も「みんなでたべるからおいしい。」と言う。その言葉を聞いてK子が「みんなでつくったおこめじゃけえおいしいんじゃ」と言い、K男も「そうじゃおいしいおいしい」と言う。

稲刈りでは、E子は全員で稲を刈ってうまくできたことを喜んでいる。

脱穀では、E子は友だちと一緒に籾殻をむき、むいた米でおにぎりを作り、「みんなとたべるからおいしい」と言って楽しんで食べている。E子の発言から、みんなと共に作ったという喜びと満足感と充実感が伝わってくる。

E子や子どもたちの会話から、子どもたち全員で育ててきた稲を自らの手で収穫して、脱穀をしたコメに対して、愛着を持っている様子もうかがわれる。

保育者は、4月から意識をしてE子が他の子どもたちと接する環境を設定している。それによりE子は徐々に他の子どもたち子どもに打ち解けていく。秋以降はE子がより積極的に友だちとともに自然環境に接し、感情を共有する姿が見られた。

事例8 しめ縄づくりととんど焼き

観察日：12月・1月

12月15日（金）：保育者が「みんなの作ったお米を食べたけど、残っているわらをどうしようか?」と言ってみんなで話し合う。その結果、簡単なしめ縄を作ることになる。

12月21日（木）：園長先生が指導者になってしめ縄を作った。K子が「おばあちゃんに教えてもらったからできる」と言い、I男が「ちょーむずかしい」と言うのをE子は黙って聞いている。E子はなかなかうまく作れない。園長先生に助けてもらいながら完成させる。E子は「むずかしかったけどおもしろかった。」と言う。

1月15日（月）：正月に自宅で飾ったしめ縄を園でとんど焼きをする。とんど焼きの火で、竹に突き刺した団子を焼く。E子は焼かれる団子を見て「おちそう。」と言う。帰宅前もとんど焼きと団子の話になった。I男が「すみがついてもおいしかった。」と言い、T子が「おもちがおちそうになった。」と言うと、E子は「わたしもおちそうになったけどもちあげた。」と言う。最後に保育者が、田植えから収穫、そしてとんど焼きまでのつながりを振り返る話をした。

E子は、しめ縄作りに苦戦したが、園長先生に助けられながらも完成させている。E子が、「むずかしかったけどおもしろかった。」と言っていることから、しめ縄作りに一生懸命に取り組み、手伝ってもらいながらなんとか完成することができたという喜びと達成感を味わったと思われる。E子はむずかしいことに挑戦する面白さを知り、自信もついたと考えられる。

とんど焼きにも友だちと楽しみながら参加をしている。一緒に作業をし、団子の感想を述べあうなど、クラスの友だちとの一体感が生まれている様子がうかがわれる。

事例9 綿への興味

観察日：2月15日（木）

前年に園で収穫したわたから種を取り、綿を作る。みんなで綿の中から種を取り出す。E子は「せんせい、このわたどうするん?」と言う。その後、「イチゴをつくる」「ふくろにいれるんじゃ」と言う。E子達は、フェルト生地にティッシュをつめていちごづくりをしたことがある。E子の言葉を受けて他の子どもたちからは「みかんがええ」「さくらんぼ」「メロンがええ」など果物の名前が出ていた。

E子は、綿から種を取る過程で、丸める、ひっぱる、ほおずりをするなどして感触を確かめながら遊んでいる。いろいろ試しながら繰り返し遊ぶことで、新しい発見をし、新しい楽しみに気付いている。

E子は「イチゴをつくる」「ふくろにいれるんじゃ」と発言している。E子達はフェルト生地にティッシュをつめていちごづくりをしたことがあり、その時間が楽しかったため、今度はティッシュのかわりに綿を入れようと発言したと思われる。E子の発言から、クラス内に会話が広がっており、E子は友だちと一緒に意見を出し合い、思いを同じにすることの喜びを感じている。

事例10 園外保育

観察日：3月19日（月）

E子は風邪で長く休み、久しぶりに登園する。みんなできし取りの園外保育に出かける。E子は小さなリュックにポケット図鑑を入れて持って行く。歩いている途中でK子が「せんせい、このあおいはな、おおいぬのふぐりいうんじゃがなあ。」と言うと、E子「そうじゃ。せんせいが、まえいようたがー。」と答える。一人数本のつくしを取る。A子が「はるのおみやげ。」と言って保育者につくしをあげているのを見て、E子は「せんせいきょうきてよかった。」と話す。保育者は「本当に治ってよかったねえ。春も探したしなあ。」と応える。

E子は、ポケット図鑑を自から用意したり、花の名前を積極的に言ったりしていることから、植物に対する強い興味や関心がうかがえる。また、A子の「はるのおみやげ」に共感して「きょうきてよかった」というE子の姿から、春と一緒に楽しめたことの喜びや、友だちや先生と一緒にいるという安心感が伝わってくる。

転園当初の4月は他の子どもと馴染めずにいたが、園の環境で過ごすことにより、1年後にはあたたかな人間関係の中で穏やかに環境を感じ取ることができている様子がうかがわれる。

4. まとめ

季節変化と動植物

E子たちは田植えから収穫までを体験したことにより、季節の移り変わりや動植物の生態に関係があることを感じ取っている。また、保育者が、田植えから収穫、そしてとんど焼きまでの一連の話をしたことにより、農家の苦労や先人の知恵を感じるとともに、食や行事も季節変化と関係していることを感じる。自然環境との関わりの中で、振り返ったり、確かめたり、考えたりしながら自然の仕組みを発見していると考えられる。

具体的な活動や体験

E子はチューリップの実を見て「せんせい、ちいさいなあ。」「たねはかわいそうじゃなあ。」と言ったり、ダンゴムシのために「はっぱもいれんと。」「わたしも（霧吹

きを)やらせて。」と言ったりしている。また、E子は「いねができるまでみずやりをしよう。」と言っている。E子は、日々生長する稲を見て「私が水やりをしたから…」と喜びを感じていると考える。このように、E子は動植物に触れて感動する具体的な体験を通して、関心や愛情が深まっていたと考える。

自立への基礎を養う

稲刈りでE子は、「どきどきしてあせかいた。」「きれてよかった。」「おもしろかったなあ」と言っている。しめ縄作りは、なかなかうまく作れず園長先生に助けてもらいながら完成させていた。稲刈りもしめ縄作りもE子には難しかったようだが、「むずかしかったけどおもしろかった。」と言っており、満足感や達成感を感じている。E子は様々な活動を楽しむことで、先生やみんなと作り出す喜びを感じるとともに、自分でしなければいけないことを諦めずに行動し成し遂げることの大切さを学んでいると考える。

このように、幼少期の自然体験は人格形成の基盤作りに様々な影響を及ぼしている。自然体験の質的、量的豊かさが、子どものその後の行動やものの見方、考え方に良い影響を与えていると考える。

謝辞

この研究は、岡山県井笠管内三郡保育協議会の13園の代表保育士とともに5年にわたり「心が育ち合う保育をめざして—自然とのかかわりを通して—」について研究したものを資料としている。この研究にあたり、ご協力いただきました三郡保育協議会の先生方に厚く御礼申し上げます。

文献

- 1) J.J.ギブソン(著), 古崎敬(翻訳) (1986). 生態学的視覚論—ヒトの知覚世界を探る, サイエンス社
- 2) フレーベル (著), 荒井 武(翻訳) (1964a). 人間の教育 上, 岩波書店
- 3) フレーベル (著), 荒井 武(翻訳) (1964b). 人間の教育 下, 岩波書店
- 4) 岩崎次男 (1990). 現代に生きるフレーベルの教育思想, フレーベル館
- 5) 汐見稔幸, 村上博文, 松永静, 保坂佳一, 志村洋子 (2012). 乳児保育室の空間構成と"子どもの行為及び保育者の意識"の変容, 保育学研究 50(3), 298-308
- 6) 高月教恵, 山縣弘子, 大村久子, 原瀬生子 (2002a). 子どもの心の育ちと保育者のかかわり(1): 0歳児の自然とのかかわりを中心に, 新見公立短期大学紀要 23, 25-33
- 7) 高月教恵, 佐藤照美, 三宅るり子 (2002b). 子どもの心の育ちと保育者のかかわり(2): 1歳児の自然とのかかわりを中心に, 新見公立短期大学紀要 23, 35-44
- 8) 藤井伊津子, 高月教恵 (2003). 乳幼児の自然環境について(1)-保育における春の環境構成の視点から-, 順正短期大学研究紀要 32, 47-57
- 9) 藤井伊津子, 高月教恵 (2005). 乳幼児の自然環境について(2)-保育における夏の環境構成の視点から-, 順正短期大学研究紀要 34, 77-89
- 10) 藤井伊津子, 高月教恵 (2006). 乳幼児の自然環境について(3)-保育における秋の環境構成の視点から-, 順正短期大学研究紀要 35, 195-209
- 11) 藤井伊津子, 高月教恵 (2007). 乳幼児の自然環境について(4)-保育における冬の環境構成の視点から-, 順正短期大学研究紀要 36, 47-57